

## 原発事故が起きても、信頼と笑顔は変わらない「サンネット産直収穫体験ツアー」

ツアー参加者たちは、甘いブドウににっこり

東北地方6県の生協で構成されているコープ東北サンネット事業連合は、宅配事業で取引のある産直産地を訪問し生産者と交流する産直収穫体験ツアーを毎年行なっています。

福島県北部、福島市・桑折町で果物を生産している産直センターふくしまは、サンネットの桃・ぶどう・梨・りんごの産直産地で、昼夜の気温差が大きい盆地の立地を生かし、環境保全型農業による果物の栽培に取り組んでいます。

9月15日の土曜日、まだ真夏の日差しが降り注ぐなか、福島市内の遠藤茂（えんどうしげる）さんの農場に、今年も、みやぎ生協組合員27人、コープふくしまの組合員14人がやって来ました。果樹園には黒ブドウの王様と呼ばれるピオーネがすずなりに実をつけています。大切に育てられたブドウのうち、特に食べ頃のもの袋がけを解いて組合員を待っていた遠藤さんが、「果樹の除染を行なった結果、モニタリング調査は不検出でした。今年の暑さに負けずに頑張ったブドウたちを、ぜひ食べてください」とあいさつします。

参加者はそれぞれが「これだ!」と思うブドウを収穫し、一粒口に運ぶと、そこかしこで「おいしい!」の声があがります。南相馬からやってきたコープふくしまの組合員、星さんは「皮ごと食べてもおいしい!こんなに美味しければ、いつでも注文するのに」と驚いていました。お持ち帰り用の直売にも行列ができます。

福島市飯坂町の平野ふれあい館では、昼食交流会が行なわれ、産直センターふくしまの婦人部が昼食を用意しました。藤田和佳子（ふじたわかこ）さんが代表して、献立を紹介。おにぎりに豚汁・南瓜の煮つけ・茄子の漬物・胡瓜の漬物の他、つきたてのお餅などを振る舞いました。特に地元の米と麴でつくった甘酒は、自然な甘みと口当たりが絶妙の一品です。決して豪華ではないけれど、作りたてのご馳走を前に、参加者である生協組合員と生産者の会話が弾みます。さっき食べたブドウのこと、普段の料理のこと、自分が食べ物とどう向き合ってきたか……食卓を囲み、同じ物を食べれば、普段の垣根を簡単に飛び越えることができます。

**つながりを感じれば頑張れる!**

「去年も苦しいなか、交流できたことで頑張れた。収穫したぶどうはちょうど食べ頃。今日の参加者はラッキー。冷蔵庫で少し冷やしてから食べて欲しい」という産直センターふくしま理事長の阿部哲也（あべてつや）さん。午後は阿部理事長の阿部果樹園（福島市笹木野）で梨の収穫です。午後になり、益々強くなった日差しから逃げるように参加者が果樹の木陰に入ると、早速、収穫したばかりの梨が振る舞われました。今年は病気で梨の収穫が半分ほどとのことですが、とれたての梨は瑞々しく、舌と喉を潤します。下に引っ張るのではなく、枝から上に持ち上げるようにと阿部さんから収穫の指導を受け、早速収穫体験。お気に入りの梨を袋いっぱい詰めて、また、もっと、この美味しさを分かち合おうと、直売分も完売になりました。

産直センターふくしまでの収穫体験ツアーは今回で4回目になります。前年 2011 年は企画検討段階で、東京電力福島第一原子力発電所の事故による農作物への影響が盛んに報道されていました。過去2回、このツアーに同行したサンネット事業連合の共同購入商品部の遠藤敬(えんどうたかし)さんも産地が大変な状況だし、とてもツアーを企画できないと思っていました。ところがその年の6月の会議で、産直センターふくしまの方から「もし出来ることなら、今年も交流ツアーを企画してほしい」という声上がり、関係者の気持ちはまとまりました。

そうだ、今だからこそやるんだ。参加者が1人や2人だったとしても、主旨に賛同してくれる人がいるならやろうと。その結果集まった48人の組合員が集まりました。彼らを前に、阿部理事長は言いました。「私たちは生産者は、みなさんとつながっている限り、決してあきらめないし、頑張る決意です」

今年の昼食会場は前年と違い、離れた場所になりました。去年使用した会場は、この日除染作業の最中で使うことができなかつたからです。場所は変わりましたが、昨年の会場で掲げられたスローガンは、今年の会場にも貼られていました。

「ようこそ、ふくしまへ。つながっていれば私たちは負けない！」

産直センターふくしまの事務局長、服部崇(はっとりたかし)さんは除染作業について、「こんなことをして果樹自体が駄目になってしまうのではないのかという不安を感じながらの作業だった」と振り返り、「顔は笑っているけど汚染された農地に心中傷ついている」と心情を話してくれました。そして、「加害者側である東電は一度もこちらに来たことがないし、何かあっても相当な因果関係を証明しろと言われ、補償もなかなか進まない。半分の顧客が離れてしまい、1年半経過しても状況は何も変わっていない。私たちにとって、サンネットの取り組みは数少ない希望。来てくれたことに感謝している」と言います。



生産者の思いを、直に聞く貴重な機会となりました。

スタッフとして3回目の参加となる

サンネット商品部の須藤(すとう)さおりさんは、交流を続け、それを伝えていくことで、生産者への応援カードが他の産地より多くなつたし、自分にとっても産直センターふくしまは特別な産地になったと感じています。

「素晴らしい産地を見て、事故の苦労も聞いた。家に帰ってぶどうを食べるのが楽しみ。私たちも買い支えてつながっていきたい」とコープふくしまの前島佳千子(まえじまかちこ)さんが言うように、事故が起きたからといって参加者の意識に特別な変化は見えませんでした。そこには生産者を信頼し、気負い無く参加している様子が伺えます。

阿部農園で参加者が書いた応援メッセージを手にする生産者に、去年も参加したメンバ

一から、「これで2枚目だね」「毎年、作るから飾ってね」と声がかかります。事故が起きてしまい、それで変わってしまったこともたくさんあるけれど、変わらないものも残っている。生産者と消費者とを信頼で結ぶ取り組みが欠かせないことを、このツアーは証明しています。